

アイヌ英雄叙事詩におけるハヨクペの語られ方

遠藤 志保

1. はじめに——問題の所在

主に和人が伝える「英雄伝説」の類型のひとつとして、「英雄」自身、「超人的能力」を語るタイプのほかに、「神仏加護譚」があると豊田「一九七六 十頁」では指摘している。「観音なり弁天への信仰という時代特有の問題」のために「神仏の加護が多く語られている」[関 一九九八 八八頁]という、伝える側の意図が大きく影響しているという点で、和人の「英雄伝説」とは異なっていることもあってか、アイヌ英雄叙事詩の主人公や勇士たちの場合には、カムイ（神）の加護はほとんど見られない。唯一の例外は本人の「憑き神」である。これは勇士たち自身と切っても切り離せない存在であることから、カムイ（神）の「加護」や「靈験」のようなものとはまた別扱いとして考えるべきであろう。

しかしながら、主人公たち勇士は自分自身の能力のみだけで

戦い、活躍しているわけではない。和人の伝承においても、特に「宝剣あるいは神通の弓矢」などの武器によって英雄が優位に立つという類型が見られることが指摘されている[関 一九九八 八八頁など]が、アイヌ英雄叙事詩においてもこうした一面は見られる。

アイヌ英雄叙事詩の語りにおいても、「クトゥネシリカ（虎杖丸）」などの特異な刀剣は登場し、その力によって敵を倒すという場合もある。しかし、刀以上にさまざまなテキストにおいて特徴的に現れるのは、「鎧」と訳されるハヨクペである。女性が主人公となる英雄叙事詩（以下、「メノコユカラ」¹）のなかには、特に顕著に、この鎧の有無によって戦いの勝敗までをも左右する様子が語られる話も見られる。

一方で、少年が主人公となる英雄叙事詩（以下、「ユカラ」²）においては、ハヨクペの有無が勝敗に直結するような表現は目立たない。むしろ、その強さはハヨクペというアイテムよりも、勇士たち自身に起因するかなのような語られ方がされている。

そこで本稿では、英雄叙事詩の戦いにおいて、ハヨクベが勝敗に直結するまでの大きな力を持っているのは、メノコユカラに限るのか、それともユカラでも同じ世界観（ハヨクベ観）を共有しているものの、ユカラではそれが表層的には語られないだけなのか、といった点に着目して、アイヌ英雄叙事詩におけるハヨクベについて考察する。

本稿では、沙流川流域に暮らしていた鍋沢元蔵（一八八六～一九六七）によるテキストを対象とする。具体的には、『アイヌの叙事詩』〔門別町郷土史研究会編 一九六九〕、『クドネシリカ』〔門別町郷土史研究会編 一九六五〕ならびに中川・遠藤〔二〇一六〕に所収の各テキストである。

このうち、メノコユカラは「余市姫」ならびに「水なしに育つ、火なしに育つ」の前半部³⁾であり、それ以外はユカラである。⁴⁾

2. アイヌ口承文芸におけるハヨクベに関する先行文献

アイヌ英雄叙事詩にあらわれるハヨクベに関する先行文献としては、萩中美枝による「ユーカーラにあらわれるハヨクベ」（一九八六年）がある。

この論文では、ハヨクベ（地域によってはアヨクベ）とよばれるものが「ユーカーラ」のなかでどのように表現・描写されるかが釧路の八重九郎ならびに沙流の鍋沢元蔵の英雄叙事詩の例などを挙げながら説明されている。

そこでまず説明されるのは、口承文芸ジャンルによる違いである。「神々のユーカーラ」においてハヨクベとは「神が仮りの姿になるときの変身用の衣」（五四頁）であるという。そしてハヨクベは、「晴れ着として身につける」ものであり、「男が用いることが多い」（五六頁）ことや、「きちんと身を包む装い方をする」（五七頁）などの特徴が挙げられている。

また、ハヨクベについての記述は少ないが、アイヌ口承文芸にあらわれる衣服についての分析としては本田（二〇〇四）が詳しい。ここでは、公刊されたアイヌ口承文芸テキストから、そこにあらわれる衣服の種類や描写の多寡について、ジャンル差ならびに語り手の差がみられることを指摘している。

さらに、英雄叙事詩のなかで着用される衣服には登場人物による違いがあることを指摘しており、「小袖」と訳されるコンソテを着用するのは「神々と人間の男性のみであり、人間の女性が身に着けているのは特殊な事例に限られる」（四五頁）一方で、「刺繍衣」などと訳されるチキリベは「人間世界に強く結びついたイメージを持つ衣服」であり、「人間界に住む女性」を象徴する衣服であったと考えられる（五十頁）とまとめている。また、コンソテには「存在を象徴する役割が与えられている」（四四頁）ことも指摘している。

以上のように、ハヨクベも含めた、アイヌ英雄叙事詩に登場する衣服についての分析は先行文献において見られるが、いずれもテキストにおける描写から、「ハヨクベとはどういうものか」

「どのような格好のものとして語られているか」を整理した考察となっている。

一方で「アイヌ英雄叙事詩におけるハヨクペとは何か」を考えるにあたっては、形状の描写や表現面のみならず、物語展開上、どのような役割を果たしているのかという点もまたひとつの側面であると考ええる。そこで本稿では、先行文献では指摘されてこなかった、ハヨクペの使われ方という角度から、「ハヨクペとは何か」について考察を試みる。

3. ハヨクペが語られる場面

本田(二〇〇四)では、アイヌ文学の他ジャンルに比べて「英雄叙事詩においては衣服描写が出現する割合が極めて高い」(三七頁)と述べられている。ただし、それは特に金成マツの英雄叙事詩において顕著であり、「他の語り手においては……新たな登場人物の衣服に対してなら語られないまま物語が展開する場合もある」(四十頁)という指摘もされている。その指摘どおり、鍋沢元蔵のテキストにおいては、ハヨクペならびにそのほかの衣服描写に関しては、「なんら語られないまま」の登場人物も少なくない。

鍋沢元蔵のテキストにおいては、新たな登場人物が現れる場面で、「あごひげの黒みは／未だ生えず／髪の色は／ちぢれていて／唐草模様のように／金色の水が／したたる如くである。／

そのように／彼の若き人／美しい姿／われより少し／年上のように／思われる」[門別町郷土史研究会編 一九六五 三十]のように、その容貌の美しさについては語られる一方、装束についての描写がされない場合が多い。さらに酒宴などで複数人が一度に登場する場合には、「チンナイ彦も／居るのである、／マウカ彦も／居るのである。／タライカ彦も／居るのである」[同前 二四三]のように名前の羅列にとどまることも多い。

そこで以下では、鍋沢元蔵のテキストにおけるハヨクペの語られ方や、物語の展開におけるはたらきについて、いくつかの場面に分類して挙げていく。

(1) 主人公

ユカラにおける主人公(少年英雄)が戦闘などのために自分が住んでいる山城から出る際に装束を身に着ける場面では、「足を入れる穴に／足を通し／手を入れる穴に／手を通し、／上の留め金や／下の留め金の／かみ合う音が／カチリと鳴り」[川・遠藤 二〇一六 二〇五―二〇六]のように語られる。

このように、ストーリー展開上にかかわらない、しかも異形ではないハヨクペの描写がされるのは、主人公の場合にはほぼ限られている。

それ以外の登場人物については、特筆すべき点のない、一般的なハヨクペやコンソテなどの武装(盛装)をしている限りにおいては、敵味方を問わず、服装については語られないことが多い。

触れられる場合でも、「よろい仕度からみて／なかなかの人物」
「門別町郷土史研究会編 一九六五 二二」のように、ごく簡単に、武装（盛装）をしていることや、その様が素晴らしいことから、彼が立派な勇士だと思われると語るにとどまっている。

(2) 出自を示唆する

「ニタイバカイエ」というユカラでは、主人公の兄が登場した際に、その正体を知らない主人公によって「私が装束を着る様／私が刀を佩く様を／真似ているようだ」「中川・遠藤 二〇一六 二一〇」と語られている。主人公の着ているものと似ているということによって、彼が主人公と何らかの関係性があることを示唆するものとなっている。このように、「何者であるのか」を示すことを目的として、ハヨクペも含め、その外見が描写されることがある。

本田（二〇〇四）では、コンソテは「描かれているとされる模様」などによって「存在を象徴する役割が与えられている」（四四頁）と指摘されているが、ハヨクペにおいても同様であると言えらる。

(3) 戦いにおけるハヨクペの破壊

初登場時には、身につけているハヨクペについては語られなくとも、戦いの最中（あるいは戦いそのものを描かないときには、戦いの後）で、ハヨクペが「どれだけ壊れたか」「どこが壊

れた（壊した）か」という形で言及される場合がある。

たとえば、「組み討ちの戦」をするなか、主人公が敵の「胸をば／突き刺して／金のくさり／糸のくさり／神鎧／その神鎧の紐の／切れる音が／カンと鳴る。／この上なき勇士の／鼻から出る血は／玉をなして流れ落ち、／口から出る血は／ぱつとはき出し、／この上なき勇士の／鎧も／われ斬りすてる」
「門別町郷土史研究会編 一九六五 一六一—一六二」のように、敵の「神鎧（カムイ ハヨクペ）」の胸紐である「金のくさり／糸のくさり」を斬ることで鎧（ハヨクペ）を壊し、鎧もろとも敵を「斬りすてる」と様子が語られる。

ただし、戦いの場面で常にこのようにハヨクペに言及されるわけではない。同様の戦い方をする場面でも、敵対者に対して「みぞおちを／したたか突くと／苦しい咳を／息つくひまなく／出して／鼻から出る血は／玉をなして流れ／口から出る血は／ぱつと流れて／いるのである」
「同前 二二五」のように、ハヨクペには触れることなく、敵対者そのものに対して攻撃をしたとのみ語られる場合のほが多い。戦いにおいてハヨクペに触れられるのは、ハヨクペが硬く、刀が効かないために胸紐を斬ったり、急所を突いたりするなど、戦い方などに直接的に関係する場合に限られる。

(4) 特殊なハヨクペ①——異形のハヨクペ

「魔神」「戦いの神」などと訳されるトゥムンチカムイという

登場人物については、「鎧を着たことは／海獣の皮と／陸獣の皮とを／組み合わせたものを／着ており／水銀の杖の／杖の上には／刀の上の／水銀の毒液／毒液の光が／ぴかぴか光つて」「門別町郷土史研究会編 一九六九 五二二」のような「鎧（ハヨクペ）」を着ていると語られる。このような描写は、トゥムンチカムイが登場する際の常套的な表現として、様々な物語において見られる。

このほか、シララベトウンクルという敵対者については「岩の鎧の／鎧のおもてに／毒液の岩とげ／いがいと立ち／太刀で穴あけること／槍で穴あけることも／できない」「門別町郷土史研究会編 一九六五 九八―九九」と、そのハヨクペの様子が語られる。このように、単に美しいだけにとどまらない、一種異形とも言える、特殊なハヨクペを身に着けている場合には、そのハヨクペの様子が描写されることが多い。

さらには、「岩」の堅さや「毒液」のために主人公が苦戦するなど、特殊なハヨクペの存在が戦いに影響を及ぼすことが多い。そのため、ハヨクペの描写は、単なる人物描写という、いわば表現面からの必要によるものではなく、物語の展開、特に戦いの展開に直接かわってくる場合に語られると言える。

(5) 特殊なハヨクペ②——姿が変化するハヨクペ

「フリハヨクペ」というハヨクペは、身に着けると「くちばしは／口槍の如く、／くちばしの先端は／水かねの毒／そこに光

り輝いて／足の爪は／くまでの束の如く／爪の先端は／毒の光で／輝いている」「門別町郷土史研究会編 一九六九 二五五」という、まさに怪鳥・フリそのものになるハヨクペである。これは、カムイ（神）が「人間の国を訪れるとき、……たとえば熊の神ならば黒いハヨクペ（衣）をまとつて熊の姿になる」「萩中 一九八六 五三」という、英雄叙事詩以外にも通底しているアイヌ文化の世界観におけるハヨクペあるいは装束の観念がそのまま援用されていると言える。

(6) 特殊なハヨクペ③——戦いを左右するハヨクペ

「イヨチウンマツ」というメノコユカラと、「水なしに育つ」という物語の前半部には、「夏の雨」を放つハヨクペと、焔を放つハヨクペという、対になったハヨクペが登場する。これらのハヨクペは、「天の国のピカタ殿より授かった」「門別町郷土史研究会編 一九六九 四七五」もので、「鎧のおもてに／赤い焔の形／白い焔の形が／鎧の上に／えがかれて」「同前 四七〇」いるハヨクペと、「黒い雲／雨の雲」や「雨の雲／大雨の形」が描かれているハヨクペ「同前 四八三」という、雄と雌の対になったハヨクペであることが、対句も用いた表現で描写される。

このハヨクペが登場する二編の物語において、戦いはほぼ同じような経過をたどる。主人公の許嫁であるポイヤウンペの噂が高いことを妬み、彼を亡き者にしようとした敵対者によって、ポイヤウンペは死んでしまう。このときは「鎧を着けずに／戦っ

たゆえ／われわけなく／斬り殺した」「同前 三八九」と敵対者から言われるように、簡単に殺されてしまう。その後、主人公がポイヤウンペを蘇生させ、ハヨクペをポイヤウンペに渡す。再戦の際にはハヨクペの特殊な能力による戦いが繰り広げられ、今度はポイヤウンペが勝利するのである。この戦いでは敵対者のハヨクペによる焔を、ポイヤウンペのハヨクペによる雨の力で消すという、ハヨクペの有無、さらに言えばハヨクペの特殊能力が勝負の行方を決定づけている。

4. ユカラとメノコユカラにおける戦いを左右するハヨクペ

前節(6)で挙げた、女が主人公となるメノコユカラでは、同じ登場人物同士の間ではあるが初戦と再戦とで勝敗が逆になっている。それは上記のとおり、ポイヤウンペのハヨクペの有無に左右されているのである。

翻って、ユカラにおいては、主人公が戦いに赴く際にハヨクペを身に付けることは語られるものの、そのハヨクペがどれほどの意味を持つのか、単に盛装しているだけなのか、コソソテなどのハヨクペ以外の装束とはどれほど戦闘において効果が異なるのか、といった点について語られることはない。そのため、ハヨクペの有無が勝敗に直結するかどうかは、テキスト中で直接的に示されることはない。むしろ、ハヨクペの有無よりも登場人物たち自身の強さこそが、その勝敗を直接的に左右してい

る要素であるかのように描かれている。

だが、ユカラにおいても、戦いにおいてハヨクペが意味を持つという描写がないわけではない。たとえば、「フリハヨクペ」という物語では、「どんな勇者の方／であろうとも／鎧なしに／魔神の世界へ／連れられたら／危険だから」「門別町郷土史研究会編 一九六九 二五六」という理由で、タイトルにもなっている「フリハヨクペ」を与えられている。また、「ニタイパカイエ」というユカラで、主人公は地下の国(罰の国)に住むトゥムンチ(魔神)の老翁から「全ての裸で／汝が戻っても／兄上たちに／助立ちさえ／出来ないゆえ」という理由でハヨクペを貸してもらう「同前 一六九」。このトゥムンチから与えられる「黒い鎧(クンネ ハヨクペ)」は、特殊な能力があると語られるわけではないが、ハヨクペを着た主人公は戦いで活躍をする。

以上のように、ユカラかメノコユカラかを問わず、戦いを左右したり、戦いにおいて必要だという理由から主人公が与えられたりするハヨクペは、いずれも「天の国のピカタ殿」や地下の世界のトゥムンチ(魔神)など、人間世界以外の存在から与えられるハヨクペであることに着目したい。

こうした人間世界以外から、いわばカムイ(神)の力を有するものとして登場するハヨクペは、単なる防具ではなく、援助者から与えられる呪具と解釈できるのではないだろうか。

対して、主人公や勇士たちが最初から持っている、いわば通常のハヨクペは、呪具としての側面は皆無に近く、主人公たち

勇士にとつての戦いにおける装束（盛装）のひとつとしての扱
いである。鍋沢元蔵の英雄叙事詩において、ハヨクペを着てい
るはずの人物についても、主人公以外についてはほとんど描写
されることなく終わるのも、このように通常のハヨクペがストー
リー展開には直接関係ないアイテムであることが関係している
と考えられる。その場合、ハヨクペは登場人物の外見描写の一
部以上の意味を持たない。

たとえば、「ニタイパカイエ」という物語は、鍋沢元蔵による
二種のバリエーションが遺されているが、初戦における主人公
の装束は、昭和二十九年筆録のテキストでは「カムイ ハヨク
ペ」、もう一方の昭和四十年筆録のテキストでは「カムイ コン
ソテ」を着て出かけたと語られる。このほか、「クトゥネシリカ」
においてラッコを捕りに来る勇士たちのうち、ひとりハヨクペ
を、ひとりはハヨクペを着ているという例もある。いずれも、
同じストーリーにおける同じ場面であるにもかかわらず、ハヨ
クペの場合とコンソテの場合とが見られることから、両者の使
い分けが峻別されているわけではなく、ある程度の等価性があ
ることが示唆される。これは、上記のような、呪具としてのハ
ヨクペ以外は、ハヨクペの有無、あるいはハヨクペかコンソテ
かという違いが戦いの展開や登場人物の強さを規定する際にあ
たつて重要視されていないことを示すと考えられる。

5. まとめ

総じて、鍋沢元蔵による英雄叙事詩においては、ハヨクペ（あ
るいはコンソテも含めた外見）がテキストで明示される場合は、
ハヨクペが特殊であったり、出自・血統に関することを標示す
るためであったりなど、何かしらの意味を持つ場合が多い。そ
のため、細やかな人物描写のような表現の豊かさを志向してい
るといふより、物語展開上必要な場合に限り語られていると
言える。

メノコユカラにおけるハヨクペは、物語や戦いにおいて重要
なアイテムとして扱われ、描写も詳しい一方、ユカラにおける
ハヨクペは、しばしばその存在が語られることすらない。しか
し、それはメノコユカラとユカラの、それぞれの世界観におけ
るハヨクペに対する観念が異なるためではないだろう。

ユカラにおいては主人公である少年英雄自身の強さにフォー
カスし、描写することに主眼を置いている。そのために、呪具
としてのハヨクペの力に頼らない戦い方を志向しており、結果
としてハヨクペの登場場面・描写は少なくなる。

一方のメノコユカラにあつては、主人公は少年英雄・ポイヤ
ウンペではなく、彼の戦いを補助する援助者たる女性である。
そのため、少年英雄を援助する女性にフォーカスするために、
強力な呪具が登場し、またその力によって少年英雄が勝利する

という展開が描かれていることで、ユカラよりもハヨクベの描写や存在が目立つことになる。

注

(1) 女性が主人公となる英雄叙事詩のアイヌ語名称は地域によってさまざまであるが、本稿で対象としたテキストを遺した鍋沢元蔵の生活経験地である沙流地方では「メノコユカラ」という名称であることと、鍋沢元蔵自身が遺稿ノートなどに「メノコユカラ」と表記していることから、本稿ではジャンル名として「メノコユカラ」を用いる。

(2) 前注1同様に、英雄叙事詩のアイヌ語名称は地域によって異なるが、本稿においては沙流地方における「ユカラ」を用いる。ただし、「メノコユカラ」とは異なり、「少年が主人公であること」はユカラであるための必須条件ではないが、ここでは「メノコユカラ」との対照としての呼称とした。なお、以下、本稿では「メノコユカラ」と「ユカラ」包括した呼称としては「英雄叙事詩」を用いる。

(3) この話では、前半部の自叙者（主人公）は少女、後半部の自叙者は少年となっている。

(4) このほかに「トリカブト姫」という物語もメノコユカラであるが、ハヨクベは出てこないため、本稿では取り上げていない。

(5) 「イヨチウンマツ」ならびに「水なしに育つ」の二編で

はともに同じような形態・能力となっている、この対のハヨクベは、「水なしに育つ」では主人公が持つ夏の雨の「鎧」だと語られているが、「イヨチウンマツ」では雌雄が逆になっている。したがって重要なのは、ハヨクベの雌雄ではなく、焰や雨といった特殊な力であり属性であるといえる。

引用文献

関幸彦「蘇る中世の英雄たち「武威の来歴」を問う」一九九八

中公新書

豊田武「英雄と伝説」一九七六 塙書房

中川裕・遠藤志保編『国立民族学博物館所蔵 鍋沢元蔵ノート

の研究』二〇一六 国立民族学博物館

萩中美枝「ユーカーラにあらわれるハヨクベ」『口承文藝研究』九

一九八六

本田優子「アイヌ口承文芸にあらわれる衣服について」『北海道

立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』十二〇〇四

門別町郷土史研究会編・鍋沢元蔵筆録・扇谷昌康訳注『アイヌ

叙事詩 クドネシリカ』一九六五 門別町郷土史研究会

門別町郷土史研究会編・鍋沢元蔵筆録・扇谷昌康訳注『アイヌ

の叙事詩』一九六九 門別町郷土史研究会

(えんどう・しほ) 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター